「花散里」の呼称と役割

――『万葉集』大伴旅人の歌をもとに――

橋本華奈

はじめに

『源氏物語』の作中人物のうち、特に須磨巻以前に源氏と関わった女性の呼称は、葵・夕顔・末摘花などのように花や植物がその由来となっているものが多い。花散里と呼ばれている女性も物語を読んでいくと、橘が呼称と深く関わっている事がわかる。だが、植物の名前がそのまま呼称となっているわけではない。また、「里」とついていても六条御息所のように地名が由来となっているわけでもない。このように、「花散里」という呼称は、他の女性たちに比べて特異であると思われる。本稿では花散里の呼称の由来を再検討し、彼女の役割とどのように関わっているかについて考察したい。

一　花散里の呼称について

まずは、作中での花散里の呼称を確認しておきたい。花散里は花散里巻で初めて登場し、その際に麗景殿女御の「御妹の三の君、内裏わたりにてはかなうほのめきたまひしなごり」（花散里巻　全集②　153頁）の女性と紹介されている。その後、源氏が花散里の屋敷を訪れた場面は次のようになっている。

まづ、女御の御方にて、昔の御物語など聞こえたまふに、夜更けにけり。二十日の月さし出づるほどに、いとど木高き影ども木暗く見えわたりて、近き橘のかをりなつかしく匂ひて、女御の御けはひ、ねびにたれど、飽くまで用意あり、あてにらうたげなり。すぐれてはなやかなる御おぼえこそなかりしかど、睦ましうなつかしき方には思したりしものを、など思ひ出できこえたまふにつけても、むかしのことかき連ね思されてうち泣きたまふ。

ほととぎす、ありつる垣根のにや、同じ声にうち鳴く。慕ひ来にけるよ、と思さるるほども艶なりかし。「いかにしりてか」など忍びやかにうち誦じたまふ。

「橘の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞとふ

いにしへの忘れがたき慰めにはなほ参りはべりぬべかりけり。こよなうこそ紛るることも、数そふこともはべりけれ。おほかたの世に従ふものなれば、昔語もかきくづすべき人少なうなりゆくを、ましていかにつれづれも紛れなく思さるらん」

（全集②　花散里巻　155頁）[注1]

このあと、女御の返歌へと続く。源氏は女御と昔語りをしている時に「近き橘のかをりなつかしく」感じ、そのうちに自然と「むかしのことかき連ね思されて」いる。また、この場面では「昔」という語を繰り返し用いられており、姉妹と古い付合いである事が印象付けられている。

さて、この花散里巻は他の巻に比べてとても短く、大きく二つに分けることができる。前半は中川のあたりに住んでいる女性の事、後半は麗景殿女御姉妹についてである。この巻では、後に花散里と呼ばれる三の君の事にはほとんど触れておらず、主に女御との和歌の贈答が記されている。花散里の巻名の由来でもあり、呼称の由来でもある、源氏の歌「橘の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞとふ」は、この場面では女御への歌であり、この場面でとりわけ三の君が注目されているわけではない。花散里巻に登場する女性たちは麗景殿女御姉妹以外も以前に関係を持ったことのある女性で、この巻全体が懐旧の念を起こさせるようになっている。この時点では「花散里」は三の君のみを指すのではなく、姉・麗景殿女御と合わせて二人を表す場合や、彼女たちの住まいを示す場合もある。

「花散里」が三の君の呼称となるのはそれから五年後、二条東院へ迎えられる場面からである。二条東院の造営は、花散里の一つの転換点として重要視しなければならない。二条東院の造営については「院の御処分なりしを、二なく改め造らせたまふ。花散里などのやうの心苦しき人々住ませむなど思しあててつくろはせたまふ。」（澪標巻　全集②　284頁）と記されている。二条東院は「心苦しき人々住ませむ」とあるように、源氏の「心苦しき」妻妾たちを住まわせようと造られる。「花散里など」とあることから、花散里は必ず二条東院に迎える女性と考えられていたことが分かる。後の展開を踏まえると「心苦しき」女性には明石の君や空蝉などが挙げられるが、麗景殿女御が含まれるか否かについては断定できない。しかし、二条東院に移り住む際は

東の院造りたてて、花散里と聞えし、移ろはせたまふ。西の対、渡殿などかけて、政所、家司など、あるべきさまにしおかせたまふ。

（松風巻　全集②　397頁）

と「花散里」のみが二条東院に移ったと記されている。おそらく、その間に麗景殿女御は亡くなったのだろう。それで、三の君のみが移ることになったのだ。これ以後、「花散里」は三の君だ

けを示すようになる。

花散里の登場回数は他の女性に比べて少ないが、繰り返し「花散里」と呼ばれており、この事も彼女の呼称の特徴の一つだと思われる。だが、まず「花散里」以外の呼称について検討していきたい。六条院の完成までは「ひんがしの御方」「対の御方」などのように「御方」という敬称が使用されている。また、「東の院」と呼ばれることもある。しかし六条院転居後の夕霧巻などでは「ひんがしの上」のように「上」という敬称が用いられている。源氏の妻妾の中で「上」という呼称が用いられるのは、葵上、紫上、そして花散里である。他の二人は源氏の正妻として、あるいはそれに準ずる女性として世間からも認められている。なぜ、花散里にも用いられているのだろうか。

先に、二条東院は花散里にとって転換点であると述べた。呼称においてもそうだが、理由はもう一点ある。二条東院で花散里は夕霧の後見を引き受けるのだ。夕霧は母・葵上を生まれて間もなく亡くし、左大臣邸で祖母・大宮によって育てられた。だが大学寮に入学後は二条東院に住んでおり、そこで勉学に励んでいる様子が記されている。源氏は正妻である葵上の代わりとして、花散里に夕霧の後見を依頼した。六条院へ移住するまでの二年余りの間、二人はともに二条東院で生活していた。源氏の嫡子である夕霧の存在は、花散里の役割にも大きく影響している。特に、六条院に転居する際に夕霧が花散里に付き添っている場面が印象的だ。

例のおいらかに気色ばまぬ花散里ぞ、その夜添ひて移ろひたまふ。…〈中略〉…いま一方の御気色も、をさをさ落としたまはで、侍従の君添ひて、そなたはもてかしづきたまへば、げにかうもあるべきことなりけりと見えたり。

（少女巻　全集③　80頁）

この引用部分の「げにかうもあるべきことなりけり」の解釈は二通りある。第一に源氏が花散里を紫上にも劣らないように世話している様子を指すという説と、第二に侍従の君（夕霧）が後見である花散里を大切にしている様子を指す説である。〈中略〉の部分には紫上の六条院へ移る様子等が記されており、源氏が紫上のために移住の用意を整えたことがわかる。それに続く〈中略〉以下の「一方の御気色も、をさをさ落としたまはで」も源氏の行為であろう。そして、「侍従の君添ひて」と夕霧の様子が語られている。この場面では夫である源氏と、息子である夕霧の花散里への対応を列挙するような形で記されているのである。両者を分けるのではなく、このように源氏・夕霧両者の行為に対して「げにかうもあるべきことなりけり」と世間の人々は感じているのだと思われる。

この六条院へ移住したことをきっかけに、花散里は夕霧の後見として世間に認識される。夕霧は雲居雁と一八歳で結婚するが、その時にはすでに中納言にまで昇進している。もちろん夕霧の努

力もあっただろうが、花散里が彼を陰ながら支えたのだろう。夕霧はついに二五歳の若さで大納言兼左大将になるのである。こうして、夕霧を立派に養育した花散里には「上」という呼称が用いられる。沢田正子氏が指摘されているように[注2]花散里は作中での役割が源氏の妻妾の一人の女性から、しだいに夕霧や玉鬘の母代りへと変化していく。花散里が「上」と呼ばれるのは夕霧関連の記述のみである。つまり「上」という呼称は、花散里と夕霧の関係を強調するために、筆者が意識的に用いたと考えられるのである。他の登場人物についても同様に、何かを強調するために呼称を変化させている場合がある。例えば、紫上の呼称についての工藤重矩氏の指摘によると、

彼の女が源氏の妻（嫡妻・正妻）ではなく法的には妾の立場であることを印象付けたい時は「対の上」「対」等の社会的呼称（実際の生活の中で使用される可能性のある呼称）を用い、法的妻でないことを読者に意識させたくない時は、「春の上」「紫の上」などの物語的呼称（実際の生活では使用されない呼称）を用いた。[注3]

とされている。このように『源氏物語』中の呼称は作者によって巧妙に変化させられていると考えられる。花散里の場合も夕霧の母と印象付けたい場合には「上」を用い、妻妾の一人として描く際には「御方」という敬称をそれぞれ用いていると思われる。では「花散里」とされている場合はどのように考えるべきなのだろうか。

二　歌語としての花散里

前述のとおり、「花散里」という呼称は源氏の「橘の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞとふ」という歌が元になっていると考えられる。従来、この源氏の歌の本歌として『古今和歌集』の「さつきまつ花橘のかをかげば昔の人の袖のかぞする」[注4]が挙げられている。この歌は『伊勢物語』第六〇段に収められている歌で、物語中「橘」によって、男の元を去った女は昔を思い出している。女に再会した男がその際に詠んだのが、この「さつきまつ」の歌である。確かに、『伊勢物語』の内容を踏まえると、この歌が源氏の歌の本歌として挙げられるのももっともである。それだけでなく、花散里巻全体がこの歌を引歌としている事は間違いないだろう。

一方、『源氏物語』の古い注釈書である『源氏釈』[注5]は、この源氏の歌に対して『古今和歌集』の歌ではなく、「たち花のかをなつかしみほとゝぎすかたらひしつつなかぬ日そなき」を挙げている。現在伝わっている歌で全く同じ歌は他に見いだせないが、『続古今和歌集』巻第三の夏歌に大納言旅人の歌として「たちばなのはなちるさとのほととぎすかたこひしつつなかぬひもなし」[注6]があり、『源氏釈』の指摘歌と本来は同一の歌であったと考えられる。さらに、この歌の出典を辿っていくと、『万葉集』に

橘の　花散る里の　ほととぎす　片恋しつつ　鳴く日しぞ多き（巻八・一四七三）[注7]

があり、また、『古今和歌六帖』にも

橘のはなちるさとのほととぎすかたらひしつつ鳴く日しぞおほき（四四一七）[注8]

とある。両者ともに大伴旅人のものとして伝わっている歌である。

先に挙げた『古今和歌集』の「さつきまつ」の歌には「花散里」という語が含まれていないが、『万葉集』や『古今和歌六帖』の大伴旅人の歌には含まれている。決して多くはないが『源氏物語』成立以前に「花散里」が歌語として用いられていたことを示している。また、『古今和歌六帖』に収められていることからも、平安期の人々に旅人の歌が読まれていたことが分かる。このことは、「花散里」という女性の構想に少なからず影響したと思われる。そこで、最も古い用例である『万葉集』の歌をもとに、歌語としての「花散る里」に迫ってみたい。

前掲の歌で注目すべきは「橘」だと思われる。花散里巻でも麗景殿女御邸は「近き橘のかをりなつかしく匂ひて」とあり、その後転居した花散里の住まいには必ず「橘」が植えられている。源氏の歌にも「橘」が詠まれている。このことからも、従来花散里の「花」は「橘」を指しているとされているのだ。記紀によると「橘」は田道間守（『日本書紀』の表記による）が常世の国から持ち帰ったものとされている。人々が夢に描いた永遠に続く世界のこの花は、常世の花として人々に愛された。この事を詠んだ大伴家持の歌が『万葉集』の四一一一番歌であり、橘の四季の様子が表現されている。「かけまくも」から始まるこの歌では、春には「孫枝萌いつつ」ほととぎすの鳴く五月には「初花を　枝に手折れて　をとめらに　苞にも遣りみ　白たへの　袖にも扱入れ　香ぐはしみ　置きて枯らしみ　あゆる実は　玉に貫きつつ　手に巻きて　見れども飽」くことはない。秋になり雨が降る日でも橘の実は美しく照り輝く。冬になってその葉に霜が置いたとしても決して枯れることはない。このように四季を通じて楽しむことができ、常緑樹である「橘」は永続性や普遍性の象徴になっていったのだ。例えば

常世物　この橘の　いや照りに　わご大君は　今も見るごと（巻十八・四〇六三）

という大伴家持の歌があるように、「橘」が常世のもの、永遠に続くものの象徴と考えられていたことがわかる。しかし『万葉集』では、常緑樹としての永続性を表す橘より、その花の咲く夏の景物の代表として歌に詠まれることが多い。それは集中の「橘」を含む歌が巻八、巻十に収められている歌であることからもわかる。また、先に引用した大伴家持の歌には「霍公鳥　鳴く五月には　初花を　枝に手折れて　をとめらに　苞にも遣りみ　白たへの　袖にも扱入れ　香ぐはしみ　置きて枯らしみ　あゆる

実は　玉に貫きつつ　手に巻きて　見れども飽かず」とあり、この部分には「橘」詠の特徴が集約されている。すなわち、次に挙げる三点である。

①「ほととぎす」とともに詠まれることが多い

②花の香しい匂いが詠まれる

③五月の節句の際の「玉に貫く」花と詠まれる

特に、①の「ほととぎす」とともに詠まれることが多いという点には注目される。集中の「橘」を含む歌七〇首程のうち、三割近くが「ほととぎす」とともに詠まれる。巻八、十の夏の雑歌・相問に限定して見てみると、「橘」を含む歌は二五首あり、その半数が「ほととぎす」とともに詠まれている。例えば、巻八には大伴村上の

我がやどの　花橘を　ほととぎす　来鳴きとよめて　本に散らしつ（巻八・一四九三）

という歌がある。渡り鳥である「ほととぎす」は夏になると「橘」にとまり、花を散らしてしまっていたようだ。「とよもす」は、大きな声や音が鳴り響く様子を表す語であるが、鳴くことによって花が散るのではなく、「ほととぎす」の往来によってであろう。「ほととぎす」はその鳴き声が印象深く、『万葉集』中でもその鳴き声を詠みこんだものは多い。その中には先に引用した大伴旅人の「橘の　花散る里の　ほととぎす　片恋しつつ　鳴く日しそ多き」（巻八・一四七三）のように亡くなった人を偲ぶものがある。それは「死出の田長」という「ほととぎす」の異称と、「ほととぎす」が渡り鳥であるということが大きく関係している。また、『万葉集』にも見られる中国の古い伝承には、蜀の国の望王の魂が化して「ほととぎす」になったと伝えられており、昔を偲んで鳴くとも言われている。渡り鳥である「ほととぎす」は毎年夏にやってきて、変わらない声で鳴くことから、昔、あるいは故人を思い出す鳥とも考えられていた。このように「橘」同様に「ほととぎす」にも常世の国の生き物というイメージがある。「ほととぎす」は「橘」をひと夏の宿とし、夏の訪れを告げたが、その花を散らすのもまた「ほととぎす」なのであった。

『源氏物語』中においても、花散里の周りには過去を思い出させる景物として「橘」「ほととぎす」が描かれている。作中で「ほととぎす」の例はわずか一〇例で、その半数が花散里巻で使用されており、ほかの場面でも夕霧や玉蔓など花散里に関係のある人物が登場している場面で用いられている。さらに、先述したとおり花散里の住まいには必ず「橘」が植えられており、源氏はその香りを懐かしんで花散里の元へとやってくる。このように、花散里の作中での役割や源氏との関係を考える上で、「ほととぎす」と「橘」は両方ともに欠くことのできないものである。

三　大伴旅人の亡妻挽歌

大伴旅人の「橘の　花散る里の　ほととぎす　片恋しつつ　鳴

く日しそ多き」（巻八・一四七三）は巻八の夏雑歌に収められており、この歌は直前の石上堅魚の歌に「和ふる」歌とされている。左注によると、石上堅魚は大宰府に赴いた大伴旅人の妻・大伴郎女が亡くなったという知らせを受け、喪を弔うために朝廷から遣わされた人物である。この両者の歌は「その事既に畢り、駅使と府の諸の卿大夫等と、共に記夷城に登りて望遊する日」に詠まれたものとされている。

この旅人の歌は従来、亡くなった妻のために詠んだ歌と解釈されていた。先に見てきたように「ほととぎす」が懐旧の念の象徴や、亡くなった人への思いを伝える鳥であった事が関係しているだろう。だが『万葉集』で「ほととぎす」が挽歌に詠まれる例は一例しかなく[注9]その歌でも夏の代表的な景物として取り上げられているだけだ。集中には「ほととぎす」を含む歌は一五〇首余りあるが、雑歌と相問にしか見られない。このようなことから、近年はこの歌の従来の解釈を否定し、望遊の宴席での歌とすることが多いようだ。しかし、挽歌に収録されていないからと、宴席での歌としていいだろうか。石上堅魚と旅人の歌は以下の通りである。

ほととぎす　来鳴きとよもす　卯の花の　共にや来しと　問はましものを（巻八・一四七二）

橘の　花散る里の　ほととぎす　片恋しつつ　鳴く日しそ多き（巻八・一四七三）

このように、旅人は歌の内容を大きく変えている。つまり、旅人は石上堅魚と同じように「ほととぎす」をモチーフとしているだけで、全く異なった情景を歌っているのだ。旅人はもともと漢学に秀でた人物であり、和歌を本格的に詠み始めたのは大宰府で山上憶良などと交わるようになってからである。旅人が中国の古い伝承に基づく「ほととぎす」のイメージを持っていたとしても不思議ではない。したがって、やはりこの歌は旅人が亡くなった妻のために詠んだものであると思われる。

では、この旅人の歌と「花散里」の関係について見ていきたい。この歌では「ほととぎす」は「花散る里」にいる。「ほととぎす」は旅人を、「橘」は亡妻・大伴郎女を指している。一対を成すはずの「橘」が散ってしまったので、わたし（ほととぎす）は「片恋」しながら鳴く日が多くなってしまった、というのがこの歌の大意であろう。『万葉集』中の「橘」を含む歌を見ていくと、大伴氏のものが多いことに気づく。その中でも大伴家持は群を抜いている。それらは「ほととぎす」と共に詠まれていることが多く、家持は好んでこの二つの組み合わせを用いていたようである。例えば、巻八の

我がやどの　花橘を　ほととぎす　来鳴かず地に　散らしてむとか（巻八・一四八六）

が挙げられる。その他にも、大伴村上の

我がやどの　花橘を　ほととぎす　来鳴きとよめて　本に散

らしつ（巻八・一四九三）

などがある。また、この二首に見られるように大伴氏の「橘」詠に多いのは「やど」という語である。『万葉とその風土』において森淳司氏[注10]が指摘されているように、『万葉集』の時代にすでに貴族の邸宅には観賞用として「橘」が植えられていたようだ。旅人の家にも植えられていたはずである。妻である大伴郎女は、庭に植えられていた「橘」を好んでいたのかもしれない。永遠に一緒にいると思っていた、遠い大宰府まで一緒にやってきた妻の死は旅人に大きな悲しみを与えたであろう。旅人は大宰府に赴いた時すでに六〇歳を超えていた。全く知らない土地で一人になってしまった旅人にとって、いっそう寂しく、辛い出来事であったはずだ。石上堅魚は「ほととぎす」と共に「卯の花」を詠んだが、旅人は「橘」へ変えている。「卯の花」も「ほととぎす」と共に詠まれることが定型化していくが、旅人は「橘」に変えることで今まで連れ添った妻への永遠の愛を表すとともに、その妻が亡くなってしまった辛い気持を表しているのである。

四　旅人の歌と花散里

先述したように、従来花散里巻の源氏の歌の本歌とされている『古今和歌集』の歌には「花散里」という語が無いが、『源氏物語』成立以前の『万葉集』や『古今和歌六帖』の歌には見られる。また、『古今和歌六帖』に収められていることからも、平安期の人々に旅人の歌が読まれていたことが分かる。したがって、花散里巻の源氏の歌「橘の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞとふ」の本歌として『新全集』などの頭注に挙げられてはいるが、『万葉集』の旅人の歌をもっと重視すべきだと思われる。

この旅人の歌が花散里巻での源氏の歌の本歌とされるのは、花散里が源氏の亡くなった妻妾の子どもたち（夕霧と玉蔓）の後見を務めている事と関係していると思われる。花散里の作中での役割は、物語の進行とともに変化している。花散里巻では、ただ源氏が昔を懐かしみ、昔語りをする女性であったが、源氏が須磨流離から戻ると二条東院に迎えられ、嫡子・夕霧の後見となる。六条院が完成すると夏の町の女主人となり、夕霧に続いて玉鬘の後見も務める。夕霧・玉鬘の母は、それぞれ葵・夕顔であり、花散里と同様に作中では夏を表す女性であった。この二人の後見を務めることで、花散里は母代りとして周囲に認められていくのである。二条東院に転居した後、源氏は以前よりも花散里を訪れるようになる。しかし、源氏は花散里のもとへは泊まらず紫上のもとへ帰っていく。二条東院への転居をきっかけに花散里は作中で重要な人物になっていくが、それは妻妾としてではなく後見人としてだと思われる。花散里は二条東院転居後、朝顔巻で源氏に次のように評されている。

東の院にながむる人の心ばへこそ、古りがたくらうたけれ。

さはたさらにえあらぬものを。さる方につけての心ばせ人にとりつつ見そめしより、同じやうに世をつつましげに思ひて過ぎぬるよ。今はた、かたみに背くべくもあらず、深うあはれと思ひはべる　（朝顔巻　全集② 493頁）

これは、紫上に対してこれまで関係を持った女性について源氏が説明している際に、花散里について語った場面である。このように、源氏は花散里と長年連れ添い、今はもう離れることが出来ないほど愛しく感じている。それは、他の女性にはない「心ばへ」を彼女が有していたからであり、また、長い間ともに過ごした彼女への信頼ゆえであろう。この朝顔巻の翌年、花散里は夕霧の後見を託される。こうして「花散里」には昔語りをする花散里だけではなく、亡き葵の忘れ形見である夕霧が加わることになるのである。後見人としての花散里が重要だと思われるのは、こうして源氏が花散里との関係を長年連れ添った大切な人だと認識したうえで、夕霧を託しているからである。

旅人は郎女が亡くなった後、一人になってしまった悲しさを歌っている。旅人の歌の「橘の花散る里」では、花は散ってしまうが常緑樹である橘はその葉の輝きを失っていない。郎女が亡くなった後、思い出を頼りに悲しみを紛らわしたのであろう。『源氏物語』で花散里は亡くなってはいないが、「花散る里」に愛する人の思い出である夕霧や玉鬘がいるという点が旅人の歌と類似している。旅人と郎女の間にも家持がいた。遺児の存在は、懐旧の念を起させる景物よりも、直接愛した女性たちを強く思い出させる。源氏にとって「花散里」とは、彼女と語らうことで昔を思い出す場所と言うだけでなく、過去に愛した女性の子どもが暮らしている「里」なのであろう。また、「橘の　花散る里の　ほととぎす　片恋しつつ　鳴く日しそ多き」（巻八・一四七三）という旅人の歌では、「花散る里」はほととぎすが独り寂しく泣いている、悲しい「里」のように感じる。だが『源氏物語』では、「花散る里」は花散里という女性がいることで、源氏が一人で抱えている悲しくつらい気持ちを和らげ癒してくれる「里」であると思われる。このように、花散里は物語の展開に応じて役割を変化させながらも、変わらず源氏を癒してくれる存在なのである。花散里が「橘」を呼称に与えられなかったのは、「ほととぎす」やそこで暮らしている夕霧などの存在が欠かせないからだと思われる。

おわりに

花散里は、これまで見てきたように「橘」と関係の深い女性であるが、他の女性たちのように「橘」が呼称に与えられず、「花散里」という呼称が与えられたのは「橘」だけでなくそこに昔を偲んでやってくる「ほととぎす」の存在が不可欠だからと考えられる。「花散里」に植えられている「橘」の香りを懐かしんで「ほととぎす」は訪れており、「ほととぎす」に喩えられる源氏

も、辛い時や悲しい時に花散里を訪ねている。源氏にとって「花散里」とは癒しの里でもあったのだろう。愛しい人の忘れ形見が残っている「橘」の里は、源氏にとって厳しい政治の世界から逃れる場所であり、また、女性たちのいさかいから離れ安らぐ場所であったのである。花散里の呼称の由来として大伴旅人の「橘の

花散る里の　ほととぎす　片恋しつつ　鳴く日しそ多き」（巻八・一四七三）を踏まえると、花散里の役割がよりはっきりしてくる。花散里と源氏は互いに認め合い、「今はた、かたみに背くべくもあらず、深うあはれと思ひはべる」（朝顔巻　全集②　493頁）に見られるように、静かで安らかな愛を持ち続けている。長年、同じ時を過ごしてきた花散里だからこそ、源氏は大切な遺児たちを託し、その成長をともに見守ったのである。花散里という女性は、作中で決して目立つ存在ではないが、源氏との関係においても、また作中で負わされている役割においても、とても重要な女性と言えるだろう。

注

注1　本文の引用はすべて『新編日本古典文学全集　源氏物語①～⑥』（小学館一九九四年～一九九八年）により、末尾に巻数と頁数を記した。

注2　沢田正子著『源氏物語の美意識』（笠間書院・昭和五四年）「第一章　脇役たちの造形（1）花散里の造形」を参考にした。

注3　工藤重臣著『源氏物語の婚姻と和歌解釈』（風間書房・二〇〇九年）「第二章　紫の上に対する呼称――「対の上」の用法――」より引用した。

注4　『新編国歌大観　第一巻』（角川書店・昭和五八年）より引用した。

注5　『源氏釈』は『源氏物語古注集成16源氏釈』を引用した。なおこの指摘は、『奥入』や『細流抄』など他の注釈書にも見られる。

注6　注4に同じ。

注7　『新編日本古典文学全集　万葉集①～④』（小学館・一九九四年～一九九六年）より引用した。

注8　『新編国歌大観　第二巻』（角川書店・昭和五九年）より引用した。

注9　『万葉集』中に「ほととぎす」を含む挽歌は、巻第三の四二三番歌である。

同じく石田王の卒りし時に、山前王の哀傷して作る歌一首

つのさはふ　磐余の道を　朝去らず　行きけむ人の　思ひつつ
通ひけまくは　ほととぎす　鳴く五月には　あやめぐさ　花橘を
玉に貫き　縵にせむと　九月の　しぐれの時は　もみち葉を
折りかざさむと　延ふ葛の　いや遠長く　万代に　絶えじと思ひて　通ひけむ　君をは明日ゆ　外にかも見む

右の一首、或は云はく、柿本朝臣人麻呂が作なり、といふ。

注10　森淳司著『万葉とその風土』（桜楓社・一九七五年）を参考にした。